

論 文

怠学型不登校生徒の学校経験

A consideration on the way how truant students experience their school

加藤 誠之（高知大学教育学部）¹

近森 勇太（清水中学校）²

KATO Masayuki¹ and CHIKAMORI Yuta²

1 *Faculty of Education, Kochi University*

2 *Shimizu Junior High School*

ABSTRACT

In this research, it will be aimed to show (1) how truant students begin to avoid attending at school (2) how they restart attending at school and (3) how they are experiencing their school. For this purpose, I, the author, conducted semi-structured interviews and analyzed the result using MORIA's "bond theory" as a guide. As to "interpersonal relationship", "friends" was the most attractive factor for school attendance. "Family" and "teachers" could be repulsive factors. As to "means of self-realization", "graduation", "entrance into high school" were attractive factors. "Consummately self-realization", "dropping out of class" were repulsive factors. As to "beliefs of normative validity", "extension of elementary school" was a attractive factor. But "compulsory education", "extension of junior high school" were repulsive factors. So, how did truant students experience their school? For them, their school is at the same time "a place to study" and "a place to have fun". However, "entrance into high school" is a branch point. If they regard their school only as "a place to have fun", they will drop out their school. On the other hand, if they regard their school as "a place to get a qualification of high school graduation", they can ackle studying in their high school.

1. 本研究の問題意識

本研究では、怠学型の不登校生徒が、どのように学校を経験しているのかを考察する。

不登校とえば、かつて学校恐怖症・登校拒否と呼ばれた神経症的傾向を指すことが多い。しかし、中学校では、非行・無気力を含む怠学傾向を持つ不登校生徒が増えている。彼らの背景や状況は、神経症的不登校の生徒に比べて知られていない。例えば、伊藤は、不登校経験者を積極的に受け入れるチャレンジスクール及び高等専修学校の事例から、不登校経験者の登校継続を支える要因を分析している(伊藤, p.222)。しかし、その対象者は神経症的不登校であり、怠学型の不登校経験者の研究は今後の課題としている(伊藤, pp.212~223)。そこで、本研究では、①怠学型の不登校生徒の登校回避プロセス及び登校再開プロセスを明らかにし、②彼らが学校をどのように経験しているのかを明らかにする。

II. 本研究の研究手法

1 本研究のデータの収集方法

本研究のデータ収集に際しては、ライフストーリー法を用いた半構造化インタビュー調査を用いた。インタビュー対象者は、中学生のときに怠学型の不登校を経験し、現在、私立 X 高等学校の定時制または通信制課程で登校を継続している男子高校生 5 名(A君~E君)である。2016年5月~7月に、一人あたり30~50分のインタビューを行った。内容はICレコーダーで録音し、その後、文字起こした。なお、5名のうちCくんについては、怠学型不登校に関するエピソードが聞かれなかったため、考察から除いた。対象者の選定に際しては、X高等学校に研究の趣旨を伝え、紹介していただいた。倫理的配慮として、データは研究以外の目的で使用しないこと、学校名や個人名は伏せること等を約束した。

表1 インタビュー調査対象者概要

名前	学年・性別	概要
A くん	定時制3年生	筆者が支援員として話している中で、中学校にはあまり行ってなく遊んでいたことを話す。
B くん	定時制2年生	中学校時遅刻や授業に出ないといった回避行動および喫煙や飲酒をしていた。
C くん		怠学型不登校に関するエピソードが聞かれなかったため、考察からは除いている。
D くん	通信制3年生	Eくんとともに授業に出ないなどの回避行動および授業時間中に学校外で遊ぶことをしていた。(Eくんと同時にインタビューを実施)
E くん	通信制3年生	Dくんとともに授業に出ないなどの回避行

ん	生	動および授業時間中に学校外で遊ぶことをしていた。(Dくんと同時にインタビューを実施)
---	---	--

表2 トランスクリプト中の用語

*	:	筆者
A	県:	インタビュー対象者の住む都道府県
X	高 校:	インタビュー対象者が現在在籍している高等学校
H	高 校:	DくんとEくんが中学校卒業後入学した高等学校
()	内の言葉	:筆者による加筆
()	内の数字	:無言の時間
h	:	笑い声
-	:	切れ目がなく語りが続けられていること

2 本研究の理論的背景

本研究では、森田洋司のボンド理論に基づき、怠学型の不登校生徒の登校行動に与える「引力」及び「斥力」を分析した。ここで言う「引力」とは、「生徒と学校社会との相互作用のなかで産出される学校社会の吸引力」であり、「斥力」とは「生徒と学校社会の相互作用過程によって産出された生徒を学校社会から引き離す作用」である(森田, p.262)。なお、ボンド理論は、ハーシ(T. Hirschi)による犯罪理論に始まったものであり、犯罪を抑制する社会的絆として、「愛着(attachment)」「投資(commitment)」「巻き込み(involvement)」「規範信念(belief)」の4つがあると考え(ハーシ, pp.16-26)。森田はこれを修正し、不登校行動について適用できるボンドの4要素を以下のとおり挙げている(森田, pp.241~242)。

表3 森田(1991)の不登校生成モデルにおけるボンドの要素(伊藤, p.209参照)

①対人関係によるボンド	両親、教師、友人など子どもにとって大切なキィ・パーソンに対して抱く愛情や尊敬の念、あるいは他者の利害への配慮などによって形成される対人関係上のつながり
②手段的自己実現によるボンド	教育や職業における、達成することで自己実現を図ることができるような目標へのアスピレーション、目標の実現可能性、目標への努力から得る充足感
③コンサマトリーな自己実現によるボンド	学校生活の諸活動から得られるコンサマトリーな(現在進行中の活動それ自体から起こるような)欲求充足
④規範的正当性への信念によるボンド	登校や出席に関する道徳的義務感情や、登校時間や出席、校則などを構成している規範的世界全体に対する正当性

III. 実際の分析

1 対人関係によるボンド

対人関係によるボンドのうち、引力としては「友人」という要素が強く、全員によって「友人がいるから学校に行く」という趣旨の内容が語られた。

Episode1

A：途中で学校行って、まあ授業受けずに、みんなとしゃべりよったりした時はある。

Episode2

*：学校の中で…楽しかったこととかを挙げるとしたら？A：楽しかったこと？授業で？それとも全部含めて？

*：あー全部含めて。

A：全部含めてやったら、やっぱり休み時間（に）友だちとかとしゃべりよったりするのやない？

Episode3

*：その授業受けてない時とかは、どんな感じで？

E：みんなと遊んで、しゃべってみたいな感じやったんで。たまに外出て行ったりみたいな。

*：そうか。

E：はい。学校行かんみたいな時はたぶんなかったですね。

*：学校は行きよったけど-

E：- みんながおるんで。

*：じゃ学校行きよったのは、友だちがおったき。

E：そうですね。

Episode4

E：たぶん友だちおらんかったら行ってない。学校自体たぶんおもしろくなかったんで。

*：あ、そうなが？

E：はい。みんながおるき（行く）みたいな。

Aくんは Episode1 と Episode2 に示すように、授業に出ないことも多かったが、学校に行ったときには「友人」と話したりすることを楽しみとしていた。学校には行かないこともあったが、学校が終わった友人と夜に遊ぶなどしていた。Eくんも Episode3・4 から分かるように、遅刻や授業を抜け出すことはあっても、「友人」がいるから学校には毎日行っていた。更に、「友人」がいなかったら学校に行っていないとも述べている。また、彼は「学校生活は楽しかった」と話している一方で、Episode4 にあるように、学校自体はおもしろくなかったと述べている。学校生活の中でも制度化された授業や行事ではなく、「友人」の存在が楽しさに影響を与えている。そして、「友人」は登校継続についてだけでなく、進学につ

いても引力として影響を与えている。

Episode5

*：高校は最初どこに？

E：あの海の…H（高校）。

*：一緒？

D：一緒。

*：おーすごいね。ずっと一緒やね。

E：僕が最初に行って、やっぱりあんまり離れるが僕も嫌やったんで、「来いや来いや」みたいな感じやったんで。

Episode5 では、H 高校への進学を考えたEくんが、友人であるDくんを同じ高校に進学するよう誘ったことが言及されている。高校進学を考える際に「友人」が行くことが理由となっているのである。その後、DくんとEくんはX 高校に入学するが、このときも二人で話をして一緒に高校に入学し、登校するというエピソードが語られている。他方、Episode6 では、「友人」が登校に関する斥力として働いている。

Episode6

*：でも今って、けっこう毎日来ゆう？

B：2年生なってからね。1年生の時は全然来やせんかった。たまに来て、11 時ばあに帰ってみたいな、毎日。

*：それは、やっぱ楽しくなかったき？勉強が。

B：楽しくなかったき。

*：んー。他になんか理由とかある？

B：んー。最初の方は友だちがおらんかったき、一人やったき、暇やったきね。今になったらみんな話したりするけど。ほとんど友だちとかおらんかったき。

Bくんは、X 高校入学当初あまり登校しておらず、その理由として、「友人」がいなかったことを挙げている。「友人」がいることは学校生活を楽しく感じさせ、登校継続につながる。他方、「友人」がいらないことは登校回避の要因となる。しかし、他方では、仲の良い「友人」がいることが登校への斥力となる事例も見受けられる。

Episode7

D：出席日数がまあまあ危ない授業があるみたいな聞いたよって、「ベル着も守りよりよ」みたいなこと（先生が）言いよったんで、そっからけっこうこう…「やばいな」、言われたことに対して「やばいな」って思って、こうベル鳴り終わる頃に席着きよったんですけど。…（省略）…で、またいつも通りベルが鳴って、席着かないかんって行きよったら、こう隣のクラスの友だちが、こうクラスに戻り際にちよっかいして逃げていくみた

いにして、(Dくんが)それを笑いながら普通に追わえて、「お前」みたいな。感じでやって、授業始まってたんですけど、「始まっちゃうき、もう戻るわ」って戻って、その授業終わって、昼休みぐらいに担任の教師に呼ばれて、職員室行ったら、「お前留年や」って言われて、「え？」みたいな。「どういうこと？」って言ったら、「何時間目の授業ベル着したろ。」「うん。」「それで留年や」って。

Episode8

D:最終的に…もう一人仲良い人もおって、その子が退学になったんで、じゃあもう行くの辞めようと思って、辞めてっていう感じですね。

Dくんは、中学卒業後すぐに入学した H 高校について、Episode7・8のような言及を行っている。出席が足りないことについて先生から忠告を受けたDくんは、「やばいな」と感じ、留年にならないようにチャイムを守っていた。しかし、あるとき「友人」と遊ぶことを優先し、留年を宣告された。その後、仲の良い友人が退学処分となったことをきっかけに、「じゃあもう行くの辞めよう」と思い、自分も H 高校を中途退学することを決めた。ここでは、友人との親密な関係が、登校への斥力となる機能を持ち得ることが明らかである。

また、「家族」は引力として作用する。Episode9・10にあるように、高校進学又は高校での登校継続を進める要因として、家族に高校は行かないといけなと言われてたこと、家族に高校は3年間で卒業するよう言われたことなどが言及されている。Aくんは、大学進学を志すきっかけとしても、親や親戚から進められたと話しており、Bくんも自分の気持ちについて「とりあえず親が3年で卒業してほしいって言うがやき、親の言うことにわざわざ歯向かうつもりもないし」と話している。

Episode9

*:その、高校行こうって思ったのはどうしてかな?
A:高校は行っちゃおかいかんって周りからも言われよったし。
*:周りとは、先生とか?
A:あー親とか。

Episode10

*:高2からは行き出したがでね?
B:高2になってからは、その、面倒くさいとかそういうのじゃなく、そういうのはあるけど、あの3年(間)で卒業せないかんきよ、俺、今から頑張らんと3年で卒業できんって言われて、成績見せられたらほんまにやばかったき。今から来ゆうが。
*:そうか、じゃ今頑張る来ゆうがは3年で卒業するためにか。3年で卒業せないかんって言うのは?

B:え、親が3年で卒業せえって言うき。

2 手段的自己実現によるバンド

ここでは手段的自己実現のバンドとして、現在の学校生活における学習活動をはじめとする活動や役割を将来の目標達成の手段として関わっていく行動としての登校を指し、学校社会でなんらかの活動を行わないことがマイナスかプラスか、あえて出席することが生徒にとって利益があると考えられているかという点を見ていく。

Episode11

*:じゃあどうしてまたここに、入ろうと思った?
D:なんか…まあ二人でよう遊んだりしよって、この子(Eくん)の家行って、話したりしゆう時に、「高卒欲しくない?」みたいな、「高校行かん?」みたいなって言うて、(Eくんが)「いや、もう行けるわけないやん」みたいな感じやって、「いやいや高卒ばあ絶対いるで」みたいな。で、その時僕めっちゃ県外行ききたかったんで、県外やったら高卒いるし、県外行くなら正直まあ…X(高校)とかバカな高校(卒業)取っちゃっても、県外やったらそんな分かんるうき、「高卒取った方が良くない?行こうや。」みたいな。

Episode12

*:そうやね、まず高校来ようって思ったのは、高校進学しようって思ったのは?
B:高卒が欲しかったき。
*:お。それは、どうして高卒が欲しかった?
B:いや、働くのに高卒はないと。高卒行って(取って)、専門学校か大学行って、なんか持っちゃかんと、働けん。

Episode13

*:行っちゃおかいかんってのは、なんで行っちゃおかいかんがかな?
A:え、なんか将来的にお金とかやない?
*:なるほどね。それで、じゃ高校行こうって思って -
A:うん。

Episode11~13に言及されているように、「高卒」という言葉が多く使われており、高卒資格を取るための手段として登校を継続させていることが分かる。また、卒業を目標とすることの理由として、就職を意識していることも言及されている。

Episode14・15から、「働かない」ための手段として高校進学を選んでいることもうかがえる。Aくんの「働くのもしんどかった」、Eくんの「学校感」、「毎日休みみたいな環境でおりたかった」という言葉に示されているように、彼らは中学校を卒業した後、すぐには「働かない」ことを望んでおり、その手段として高校を利用している。将来的には就職を考え、高卒資格をとるために高校に登校す

るが、中学校卒業後の高校生にあたる年齢では「働かない」ことを選択しているのである。

また、中学校でも、高校進学を意識することは、登校への引力となる。Episode16 から分かるように、「高校に行きたい」という考えを抱いたときに、焦りを感じて学校に行ったり勉強をしたりという行動をとっていたことが分かる。中学校における登校への引力は「高校進学」という点があるようだ。一方、登校しないことによって目標が実現されたということや目標を達成できないということに直面したということについては言及されておらず、生徒の視点として手段的自己実現によるバンドにおける斥力の側面は見出せなかった。

Episode14

E: たまに高校行きたいっていう(ことも)頭にあったんで、思いっきり勉強したりとか。

*: 一緒? (Dくんに聞く)

D: みたいな感じですね。

*: 高校行きたいっていうのは、どうして行きたかった?

E: もうでも -

D: - 働くのが、ちょい違う、っていう。

E: まだ、この…「学校感」みたいな…その、休みとかいうか、毎日休みみたいな環境でおりたかったんで。働いたら休みの日限られてくるし。

*: うんそうやね。

E: (高校) 行きたいっていうがで、たぶん焦ってきて、学校、勉強みたいな。

*: あ、じゃ途中から。

Episode15

*: その、高校行こうって思ったのはどうしてかな?

A: 高校ま行っちゃおかいかんって周りからも言われよったし。
(省略)

A: んー…そうやね。それだけかな。まあまあ働くのもしんどかったし。

3 コンサマトリーな自己実現によるバンド

コンサマトリーな自己実現によるバンドとは、現在の活動それ自体の中に充足価値を満足させるものがあるかどうかによってその活動の場へのつながりの強弱が左右されるという点の指摘であり、つまり学校生活それ自体に満足感を得られるとき学校へのつながりが強くなるという見方である。

今回の調査においては、コンサマトリーな自己実現によるバンドについて引力と考えられる言及がなされていなかった。これは、「いやいや行きよったね。」(Aくん)「面倒くさい場所」(Bくん)「たぶん友達ちおらんかったら行ってない。学校自体たぶんおもしろく

なかったんで」(Eくん)といった語りで見られるように、中学校自体に満足感を得られていないことが分かる。

他方、斥力と考えられる要素は言及されている。それは「授業についていけない」という点である。Episode16 や Episode17 にあるように、授業に対して「何もすることがない」、「おつてもぼ一つてしちゅうだけ」という言及がされている。このように「授業についていけない」ことにより、授業という学校の中で大きな位置を占める活動に満足感や充足感を得られず、授業に出ないという行動につながっていく。

そして本人にとっても、「全然先生にあたることもなく、自分がそれ(勉強)を止めた、それだけのことやったね。」(Eくん)という語りから分かるように、授業に出ないこと、不登校行動に走ることは、満足感を得られない学校活動をやめたという「それだけのこと」として行動に出ていたのである。このようにコンサマトリーな自己実現によるバンドを感じられないことが登校の斥力となっている。

Episode16

*: そのまじめに最初学校行きよった時っていうのは、どんな感じやった? 学校に対するイメージとか。

A: もう、いやいや行きよったね。授業も暇やったし。

*: うん。

A: 話聞いただけやったりするやん? ああいう時とか、なんか…何、もう眠くなる。何もすることないき。

Episode17

*: どういう授業に出なかったとか。

E: とりあえずたぶん授業についていけんなってっていうぐらいから、おつてもぼ一つてしちゅうだけやし。そっからたぶん。

4 規範的正当性への信念によるバンド

規範的正当性への信念によるバンドは、引力・斥力ともに全員ほぼ同様の内容について言及していた。

引力については、「小学校の延長」として中学校をとらえていたことが登校につながっていた。Episode18・19 にあるように、彼らは、中学校に行くことは小学校に行くことと変わらないと考えている。Eくんも、中学校のイメージについて「全然そんな小学校と変わらん。学校が変わっただけ。」と述べている。

中学校は「小学校の延長」として行くところであり、「めんどくさい」・「おもしろくない」と思いながら、「行かないといけない」という社会的規範に則って登校するのである。また、高校についても、Episode20 のように「最低限入ったから行かなければいけない」という思いも持っていることが分かる。

Episode18

*：でも授業に出よったっていうのは。

B：中1…中2の最初の方は出よった。

*：んー。めんどくさかったけど出よった-

B：-うん、そう。

*：っていうのは、どういう…。

B：小学…小学生が授業行けるのと一緒の感じ。誰も小学生らも授業が好きで出やせんろ。先生に怒られるき出ないかんとか。そんな感じやった。

Episode19

*：毎日学校行って。

D：中学校自体、行きよった小学校の真隣にあって-

*：そうながや。

D：-仲良かった子らも、ほとんど繰り上がりで一緒になったとき、特にこう…中学生やっていうのはなかったとき。もう全然感覚は変わらん。もう制服…着物が決められたってだけの、建物が変わったって。それだけの感覚。

Episode20

*：入ったばかりの時ってどんな感じやった？学校行くことに関してとか。

A：え、めんどくさいけど…もう…まあ…何、行かんかったらね、卒業もできんし。行かないかんもんやき。

*：そうか。行かないかんもんっていうのは？どういうところでそういうの思った？

A：え、どういうところで？

*：どういうことで？

A：まあでも、入ったしね、最低限は。

こうした規範は、時として、親から与えられる。Bくんも「とりあえず親が3年で卒業してほしいって言うのがやき、親の言うことにわざわざ歯向かうつもりもないし」と話しており、親が3年間で卒業してほしいと言うことが生徒の規範意識に影響を与えている。

「対人関係によるボンド」とも関連する親とのボンドについては、中学校に関する言及はされておらず、高校進学や高校での登校継続に関して言及がされている。ここでは、高等学校が義務教育ではなく、行かなければ卒業することができないことが反映されている。

他方、中学校に目を向けると、「義務教育」であるという点が生徒の登校への斥力となっている。Episode21～23やEくんの「遊びよったら勝手に卒業みたいな感じやったんで」という言葉にあるように、中学校が「義務教育」であることを生徒も感じており、彼らは「義務教育」を「学校に行かなくても卒業できる」「何をやっても大丈夫」という意味で捉えている。「義務教育」という社会的ルールが意図しない側面として登校への斥力として働いていることが分かる。

Episode21

A：え、もう最初は、もう小学校の頃とか、学校も楽しく行きよって、中学校も別に休み時間とかは楽しかったし、行かないかんもんやき、行きよったけど、もう途中から、ちよっとずる賢くなったのかな？うん。-

*：hh

A：-行かんでも卒業できるき。

Episode22

*：なんかその、ちよっとずつ、そう変わってきて、学校行かんでもいいやってなったのは、どういう考えとか。

A：まあ行かんでも卒業できるし、遊ぶの楽しいき、学校におけるよりは。

Episode23

*：どんなところが楽しかった？

D：好き勝手できるところが。

*：好き勝手というと？

D：義務教育なところが。

*：義務教育なところが。なるほど。詳しく聞いてもいい？

D：何やっても大丈夫なところが、やっぱり中学校やなって感じですね。

Episode24・25に言及されているように、「義務教育」である中学校で登校を回避していた場合、高校へ入学しても「授業に出ない」・「寝坊」・「授業エスケープ」という行動を続ける。高校は「義務教育」ではないことを意識していないため、「停学」や「退学」を宣告されるに至った。高等学校を「中学校の延長」としてとらえることが、登校への斥力となっていた。

また、彼らは、学校的規範に抵抗しようとする考えも持っていた。Bくんは中学校のとき「さぼったりするのがかっこいいと思いつたき」と話している。Eくんは授業時間中に学校外に出て買い物をしてしたことについて、「朝と学校終わってからしか、普通の人はたぶん行きやせんかったがですけど、それを縛られちゅうがも嫌やったし」と話している。彼らは学校的規範に抵抗し、束縛を嫌って規範を破ることを「かっこいい」と考え、他の生徒がしないことを行っていたのである。

Episode24

*：じゃあその高校のことも聞いていいですか？

D：短いんですけど。

E：僕はかなり短いですね。

*：ほんと？どれくらい？

E：僕1ヶ月おるかおらんかぐらい。

D : hhh

* : それ、辞めたのはどうして？

E : 馴れ合いみたいな。通用せんかったみたいな。中学校で授業出んかったも卒業できたけど、高校は違うみたいな感じやって、自主退(学)を勧められて、退学みたいな。

(中略)

* : それに授業とかあんまり行ってなかったりとか？

E : あ、そんな…初日からそんなやっただすね。馴れ合いみたいな感じで。たぶん1ヶ月ぐらいで。

* : その、最初から授業行かんかったのはどうして行かんかったのか。

E : たぶん高校っていうのがあんまり把握できてなくて、内容を。普通におったら卒業できるろって、そんな感じやったんで。そもそも行く気がなかったがかもしれん。ただ延長みたいな。

Episode25

* : Dくんはどんな感じで、高校は。

D : 僕たぶん10ヶ月くらい、行ってるんですけど。

* : お、けっこう長い、ねhh。

D : そうですね。でもなんやろ、停学とか退学とか留年とか、そういうシステムをあんま考えんに、ずっと中学校感覚で行きよって、寝坊、途中抜けたりとか、ふざけたりとか、っしてよって、停学やとなって、「あ、これが停学か」という感覚。けどそれでも大していろいろ考えずに。

V. 総合的考察

1 怠学型の不登校生徒の登校回避行動の要因

怠学型の不登校と考えられる生徒も、中学校入学後、すぐ登校回避行動をとっていたわけではない。彼らを中学校入学後も登校継続に向かわせていた要因は、一つは親しい友人の存在であり、もう一つは中学校を小学校の延長としてとらえていたことである。

では、彼らは、何をきっかけとして登校回避行動に至ったのだろうか。本研究では、「勉強についていけないこと」及び「教師との関係の悪化」が認められた。前者は、多くの生徒の実感である。

彼らは、学校のイメージについて「勉強するところ」(Dくん)と答えたり、学校は「あった方がいいと思う」「勉強大事やき」(Aくん)と答えたりしており、「学校」と「勉強」とは強く結び付けられている。それゆえ、学校で授業や勉強についていけなくなれば、学校に適応できていないという思いを抱くのではないだろうか。

「学校自体楽しくなかった」ということも語られており、勉強についていけなくなれば、学校生活に意味を見出すことは困難になっていることがうかがえる。「勉強ができないこと」・「授業についていけないこと」は、コンサマトリーな自己実現によるボンドの崩壊に直接かかわっている。その他、Aくんの語りにあるように、朝起

きられないということも注目すべき点である。朝起きられないことは、学校生活に対する嫌悪感の身体的な表出とも考えられる。

登校回避に至った生徒は、授業にも出ないため学校にいてもすることがなく、暇な時間ができる。彼らがこの時間を埋め合わせるために取った行動が、学内での喫煙・飲酒、無断外出などの校則違反である。

ただし、怠学行動と非行行動とは同時に現れるわけではない。「勉強についていけない」、「教師との関係が悪くなった」などの背景をもって登校回避に至った生徒が、授業や教室では得ることができない「楽しみ」を求めて非行行動に至るのである。Dくんの「ハラハラドキドキ」という言葉に表れているように、楽しくない学校の中で何か楽しいことを見つけたいと思ひ、最初は教師に見つからないように行うことに楽しみを得ようとし、これが習慣になっていったことも述べられていた。つまり、怠学型不登校生徒の特徴のひとつが非行だとされているが、その背景を探ると、非行がきっかけではなく、その他のきっかけとなる出来事によって「楽しみ」がなくなり、それを満たすための行動として非行行動に至ったのである。

インタビュー事例で考えると、勉強についていけなくなったことにより学校生活自体の満足感が得られなくなった生徒が学校に満足感を見出すため、つまりコンサマトリーな自己実現によるボンドを得るためのひとつだったのかもしれない。あるいは、教師との対人関係によるボンドを得られなくなったため、非行行動をとり教師に注意を受けることによってボンドを感じようとしていたのかもしれない。

いずれにせよ、怠学型不登校生徒にとって、非行行動は「楽しみ」を得る手段のひとつとして後から生じたものだったのではないだろうか。

2 怠学型の不登校生徒の登校継続要因

では、中学時代に怠学型不登校を経験した生徒が高校で登校継続に至る要因としては、何が挙げられるであろうか。一つは「居場所ができる」ことである。こうした場合は、彼らにとって「寝転がって携帯つく場所」、マンガやゲームがある「居心地いい場所」であり、「楽しみ」を得られる場所・行く意味を見出せる場所であった。もう一つは、手段的自己実現によるボンドを得ることである。

彼らは、中学校で登校を再開し、これを継続する際、高校進学という目標を見つけている。高校に進学するため、中学校を勉強の手段の場として位置づけていたのである。また、高校進学後に登校を継続する際も、「就職したい」・「高卒資格を得たい」という目標を掲げ、その手段として高校への登校を継続していた。

DくんとEくんが他の高校を退学した背景にあった要因は、高校に登校して卒業することに意味がなくなったからである。彼らは、「働きたくない」・「友だちが行くから」という理由で進学した高校で目標を見出せず、目標を実現するための手段として高校を位置づけられない。

しかし、彼らも就職を考え、高卒資格を得たいという目標を持った後は、登校を続けることができていた。なお、高校への進学及び卒業、就職という一連の目標を与えるボンドとして、家族の存在は見逃せない。家族によって、手段的自己実現のボンドや規範的正当性への信念によるボンドが形成されていたのである。

VI. おわりに

怠学型不登校生徒にとって、学校とはどのように経験されていたと言えるであろうか。

彼らにとって、学校は「勉強をする場」・「楽しみを得る場」・「目標実現の場」であった。彼らは、中学校で授業についていけなくなったとき、中学校を楽しみを得る場としてとらえられなくなり、中学校を意味のない場と考えるようになって、登校回避行動を取るに至った。

しかし、高校進学は、学校のとらえ方の分岐点となる。高校を「楽しみを得る場」としてだけとらえては、やがて通用しなくなって退学という径路をたどる。他方、高卒資格を得て就職するという目標を実現するための場として進学した高校では、中学校では回避していた勉強にも向かえるようになっていたのである。

なお、本研究は、2017（平成29）年1月に高知大学大学院総合人間自然科学研究科教育学専攻学校教育コースに提出した近森の修士論文「怠学型不登校生徒の学校経験」に加筆修正したものである。本論文の公表については、X 高等学校長の許可を得ているので、ここに記して感謝する。

引用文献

- ・ハーシ, T. (森田洋司・清水新二監訳) (1985) 『非行の原因—家庭・学校・社会のつながりを求めて—』文化書房博文社
- ・伊藤秀樹 (2009) 「不登校経験者への登校支援とその課題—チャレンジスクール, 高等専修学校の事例から—」(『教育社会学研究』第84集)
- ・森田洋司 (1991) 『「不登校」現象の社会学』学文社